

國學院大學学術情報リポジトリ

社会主義インターナショナル・シュトゥットガルト大会(1907年)とフランス社会党第3回リモージュ大会(1906年)・第4回ナンシー大会(1907年)の歴史的考察(1) :

第1次世界大戦前夜の反戦平和問題とジャン・ジョレース

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 国学院大学法学会 公開日: 2024-02-29 キーワード (Ja): ジャン・ジョレース キーワード (En): 作成者: 横山, 謙一 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002000399

社会主義インターナショナル・シュトゥットガルト大会（1907年）とフランス社会党第3回リモージュ大会（1906年）・第4回ナンシー大会（1907年）の歴史的考察(1)

——第1次世界大戦前夜の反戦平和問題と
ジャン・ジョレース——

横 山 謙 一

はじめに

グローブ大会での統一したフランス社会党 SFIO の結党から1914年8月の第1次世界大戦開戦までのフランス社会党 SFIO と社会主義インターナショナル（第2インターナショナル）の最大の課題は、差し迫る戦争の脅威にいかに対処しこれを阻止するかであった。そのための戦術や方法に多くのエネルギーが費やされたことは、フランス社会党 SFIO と社会主義インターナショナルの議事録を繙けば一目瞭然である。第2インターナショナルの差し迫る戦争に反戦の立場から闘いを挑み続けた努力が国際的評価を受けたことは、1913年と1914年のノーベル平和賞候補に推挙されたことによってもうか

(1) HAUPT, Georges ; *Le congrès manqué. L'Internationale à la veille de la Première Guerre Mondiale. Étude et documents*. Paris. François Maspero. 1965. p. 9 第2インターナショナルはノーベル平和賞を受賞しなかったけれど、1913年に国際平和ビューローの創立者の一人で1907年から死没まで議長を務めたベルギー労働党の元老院議員であった国際法学者アンリ・ラフォンテーヌ Henri LA FONTAINE がノーベル平和賞を

がい知ることが出来る。

第1章 1907年第2 インターナショナル・シュトゥットガルト大会の歴史的背景

はじめに

1907年8月に開かれたシュトゥットガルト大会は日露戦争と第1次モロッコ（タンジール）事件をへて、第2インターナショナルが戦争の脅威にいかに対処するかを本格的に審議した最初の社会主義インターナショナル大会となった。最終的にはドイツ社会民主党 SPD とフランス統一社会党 SFIO の方針はこの問題に割り当てられた「軍国主義と国際紛争 Le militarisme et les conflicts internationaux」第1分科会（委員会）では一致せず、その小委員会で妥協案が模索され、結局、両党の見解を折衷した案を一本化した決議を可決した大会となった。そしてより具体的な行動方針は次回のコペンハーゲン大会に先送りされることになった。

フランス統一社会党 SFIO は1906年11月の第3回リモージュ Limoges 大会と1907年8月の第4回ナンシー Nancy 大会でヴァイアンが提案する「軍国主義と国際紛争」についてのセーヌ県連合のいわゆる「ヴァイアン－ジョレース決議」（フランス統一社会党 SFIO リモージュ大会では「セーヌ県連合決議」と称されナンシー大会ではリモージュ大会で議決された多数派の議案としての提案であることから「リモージュ決議」と呼ばれた）を議決させて、手ぐすねを引いて第2インターナショナル・シュトゥットガルト大会に参加した。フランス統一社会党多数派＝主流派となったヴァイアン－ジョレース派は、1898年のファショダ事件とその後が続いて起きた日露戦争と第1次モロッコ（タンジール）事件は差し迫る戦争の脅威に第2インターナシ

ナルが一致協力していかに対応するかを決定することが焦眉の問題であると強く確信していた。特に第 2 インターナショナル内の二大政党であるドイツ社会民主党 SPD とフランス統一社会党 SFIO が国際情勢についての解釈を一致させ、国際紛争に対する対応を決定することが緊急の課題であると考えていた。というのもフランスの党はドイツの党の態度に大きな懸念を抱えていたからであった。それはドイツ社会民主党 SPD が 1907 年の帝国議会議員選挙で議席を半減させて敗北し、今後の選挙に影響を及ぼしかねない急進的な国際的行動を行うことに躊躇する機運が党内で強まっていたからである。特に「ジョレース - ヴァイアン決議」に戦争を阻止するためには議会と街頭での抵抗運動が十分でない場合には、労働者のゼネラル・ストライキと蜂起という極端な手段をとってでも戦争阻止の行動を行うと提起されていたことがドイツ社会民主党 SPD には何としても受け入れがたかった。

1907 年の第 2 インターナショナル第 7 回大会まで、帝国政府の反対からドイツでは開催されて来なかった。ようやくこの年にドイツ社会民主党の強力な地盤であるヴュルテンブルク州の首都であるシュトゥットガルトで開催にこぎ着けることが出来た。第 2 インターナショナルはこの頃絶頂期にさしかかっていて、ジョレースが「インターナショナルは混沌の時代を脱した」と、一方レーニン「大会は第 2 インターナショナルの決定的安定化を意味し、大会が極めて深化した影響力を行使する会議となった」と評したこの大会は、ドイツ社会民主党 SPD が指名し国際社会主義事務局 BSI が補佐した大会組織委員会が周到な準備の上で、インターナショナル内でのドイツの党の実力を遺憾なく世界に示す機会となるであろうこの大会に臨んだ。

1. 第 1 次世界大戦前夜のフランス社会党 SFIO の課題

統一フランス社会党 SFIO の大会に限定すれば、この党の統一から第 1 次世界大戦開戦までの期間に 11 回の党大会が開かれた。これらの党大会では、1. 社会党と労働組合との関係、2. 愛国主義と軍国主義に対して党がとるべき態度、3. 革命に到達する政治的戦術、とくに改良を党の政治戦術における

政策体系の中にいかに位置づけるかの3点が最も重大な争点として議論された。⁽²⁾これら3つの大きな課題は相互に関連しており、単純に切り離して取り上げられるべきではないことは言うまでもない。

第1の社会党と労働組合との関係は労働組合運動では1906年のフランス労働総同盟 Confédération Générale du Travail アミアン大会でいわゆる「アミアン憲章 Charte d'Amiens」を採択し、社会党内ゲード派による労働組合に対する社会党の指導を峻拒し労働組合の自律を宣言した。この問題に対して社会党全体がどのような態度をとるのが問われ、フランス社会党 SFIO リモージュ大会で党を二分する一大議論となった（第2章で詳述する）。

他方で社会党に対抗するフランス労働総同盟 CGT は祖国と愛国主義を否定して反軍国主義を貫き、「ゼネラル・ストライキ grève générale」によって社会革命を実現すると主張したが、そのイデオロギーと戦術は社会党極左派のギュスターヴ・エルヴェ Gustave HERVÉ⁽³⁾が率いるエルヴェ派に大きな影響を与えた。一方エルヴェの軍隊内部でのゼネラル・ストライキを真っ向から反対しながらも、統一後にあらたな党内多数派＝主流派となったヴァイアン-ジョレース派は戦争を阻止する手段としての議会と国民諸階層による反対運動を、そしてそれでも阻止するに及ばなかった場合の、開戦直前の労働者階級による「ゼネラル・ストライキ」と「武装蜂起」の戦術を提起した。

第2の愛国主義と軍国主義にたいする社会党の態度は、党内分派によって異なった。極左のエルヴェ派は、「労働者は祖国を持たない」というマルクス・エンゲルスの「共産党宣言」の文言を教条的に受けとめて戦争時の外国

(2) NOLAND, Aaron ; *The Founding of the French Socialist Party 1893-1905*. Oxford. Harverd University Press. 1956, p. 188

(3) エルヴェ、ギュスタヴ、HERVÉ, Gustave (1871年-1944年)。社会党における徹底した反愛国主義・反軍国主義極左派の指導者となり、彼が主宰する新聞『社会戦争 Guerre sociale』は社会党極左派の拠点となった。しかし第1次大戦開戦直後戦争に協力し、偏狭な熱狂的愛国者となり、社会党から除名された。MAITRON, Jean ; *Dictionnaire biographique du mouvement ouvrier français*. Paris. Les Éditions ouvrières. 1975., t. 13, pp. 47-53

からの侵略に対してもブルジョア政府に支配される祖国を防衛するべきではないとの極端な主張をする。また軍は労働者の弾圧に使われてきたとして、当然反軍国主義の立場を採る。これに対して中間派にして主流派=多数派のヴァイアン-ジョレース派は、祖国が侵略された場合には労働者は祖国を防衛しなければならないとする。祖国の枠内で労働者階級は成長して、普通選挙を勝ちとり、政治権力を奪取できる可能性が出来たというのである。ただし祖国が他国を侵略して戦争を引き起こした場合は、自国の政府に抵抗するという。ブランキ派の伝統を受け継ぐヴァイアン派にとっては、革命的愛国主義の立場に立つ当然のイデオロギーであった。同様に軍部は労働者を抑圧する主要な手段であるとするブランキ派にとって反軍国主義の立場は一步も譲れない重要なイデオロギーであった。

第 3 の改良と革命の問題は、社会党の日常的改良を究極目標である社会革命の中にいかに位置づけるかという党にとって避けて通れない問題であった。改良にのみ専念すれば社会党は改良の党になってしまうし、社会革命を優先させれば、国民全体からも労働者階級からも支持を得ることは難かしくなり、普通選挙の下での選挙活動にも支障をきたす。

社会党はこの戦術問題を正面から取り上げ議論を尽くした末に、主流派の指導者ジョレースが主導して有名な「トゥルーズ動議」(1908年10月)をトゥルーズ党大会で棄権票 1 票を除く総投票 326 票中賛成 325 票で採決させた。⁽⁴⁾

この動議は「党は革命の党であるがそれゆえ一層本質的に積極的に改良的であり、唯一それぞれの改革と征服をより広い諸要求とより大胆な征服を出発点かつ梃子の支点にできる唯一の党」とし、「選挙活動に取り組み、社会主義の議会と立法の能力を増強する」と宣言するものであった。この決議によって党の社会改良への取り組みを積極的に行えるようになった。⁽⁵⁾

(4) Parti Socialiste (Section française de l'Internationale ouvrière) ; 5^e Congrès National. Tenu à Toulouse. les 15, 16, 17 et 18. Octobre 1908. Compte rendu sténographique. Paris. Au siège du Conseil National. 1908. p. 489

(5) DUROSELLE, Jean-Baptiste ; *La France de la «Belle Epoque»*. *La France et les Français*. 1900-1914. Paris. Éditions Richelieu. pp. 346-347

そして1910年と1914年の総選挙で社会党は大きな躍進を果たすのである。

2. 1900年代の国際情勢——モロッコ問題を中心に

ここで1900年代の国際情勢を簡略に総覧したい。第1次世界大戦前夜の国際的危機は第1次モロッコ (タンジール) 事件に起点を見ることが出来る。イギリスとフランスのアフリカでの対立は1898年のファショダ事件⁽⁶⁾の後にフランスの譲歩によって武力衝突は回避され、1897年からフォン・ティルピッツ提督によって計画されたドイツの艦隊増強計画に恐れを抱いたイギリスと、ツァーリズム国家ロシアとしか同盟関係を持たなかったフランスは接近して、日露戦争の勃発がイギリスとフランスの同盟締結を急がせた。そして1904年4月8日に英仏協商 (アンタント・コルディアル Entente Cordiale) は締結される。長期間の交渉の末に英仏協商による保障を手に入れたデルカッセ DÉLCASSE⁽⁷⁾ 外務大臣はモロッコへの本格介入を開始する⁽⁸⁾。

ウジェヌ・エティエンヌ Eugène ÉTIENNE⁽⁹⁾ が事実上の党首を務める植

(6) ファショダ事件については、国内政治と国際政治の両面からこの事件を再評価しようとしたロジャー・ブラウンの研究が注目に値する。cf. BRAUN, Roger, Glenn ; *Fashoda Reconsidered. The Impacte of Domestic Politics on French Policy in Africa 1893-1898*. Baltimore and London. The John Hopkins Press. 1969.

(7) デルカッセ、テオフィル、DÉLCASSÉ, Théophile (1852年-1923年) ; デルカッセはトゥールーズ大学で学び、パリに出てガンベッタに見出され、外交と植民地の専門家としてガンベッタ派の新聞に健筆をふるった。1889年故郷のアリエージュ県から急進左翼の代議士に選ばれ、1898年に第2次ブリソン内閣の外務大臣となり、1904年の英仏協商を締結し、1905年に第1次モロッコ問題でルーヴィエ首相に解任されるまで外相の地位に留まった。第1次大戦が始まり第2次ヴィヴィアニ内閣でイタリアの連合国側からの参戦に貢献したが、ブルガリアとギリシアの外交で失敗し、1915年外相を辞任した。PIERRARD, Pierre ; *Dictionnaire de la Troisième République*. Paris, Larousse, 1968, pp. 88-90

(8) DUROSELLE ; *La France de la «Belle Epoque»*, op. cit., pp. 327-328

(9) エティエンヌ、ウジェヌ、ÉTIENNE, Eugène (1844年-1921年) ; アルジェリアのオランの代議士。フランス植民地経営の利益代表として知られ、アフリカへの進出政策を政府に強く求めた。1905年1月に第2次ルーヴィエ内閣の内相となり、同年11月に陸軍大臣に移り、幾度か陸相を務めた。3年兵役法の推進者としても知られる。PIERRARD ; *Dictionnaire de la Troisième République*. op. cit., pp. 111-112

民地拡張論者の会派「植民党 parti colonial」が設立した「仏領アフリカ委員会 comité de l'Afrique française」(1891年設立)の肝いりで出来たエティエンヌが議長を務め多くの大実業家を結集する「モロッコ委員会 comité du Maroc」が1903年12月に結成される。1904年に借款の協定が締結されたあとで、タンジール(タンジェ)公使サン＝ルネ・タイヤンディエ Saint-René TAILLANDIER は政府に行動を促す。彼はリオテ LYOTHEY 大佐のアルジェリア国境地帯での軍事的浸透作戦に反対し、直接フェズ(当時のモロッコの首都)のスルタン政府に働きかける。デルカッセはタイヤンディエのフェズの政府と直接交渉してモロッコに「平和的」に浸透する政策を採用する。1904年10月始めにタイヤンディエはジョナル JONNARD とリオテ(11)にあい、軍事的浸透作戦をやめさせ「平和的」拡大作戦を練り上げる。フランスの顧問がモロッコ軍を再編し、借款団の援助で国立銀行を創立することをデルカッセは構想する。そして1905年1月にタイヤンディエはフェズに(12)着く。

ドイツはこうした策謀を許さなかった。ドイツの外交首脳は想定外であった英仏協商締結に苛立ち、経済界はモロッコでのドイツの権益が危うくなったと不安になった。帝国政府は反撃が必要であると考えた。

モロッコの大西洋岸に海軍基地の設営をもとめるビューロー宰相の提案には皇帝が反対した。フランスと交渉してタンジール(タンジェ)への公使館

(10) リオテ、ユベール、LYOTHEY, Hubert (1854年-1943年)；トンキンやマダガスカルで経験を積んで、植民地経営を得意とする陸軍軍人となった。1900年に大佐に、1906年に少将に昇格しモロッコへのフランス浸透作戦の先駆となる。1916年12月に第6次ブリアン内閣の陸相となるが、議会での対応を上手くできず翌年辞任した。PIERRARD ; *Dictionnaire de la Troisième République. op. cit.*, pp. 166-167

(11) ジョナル、セレストン、JONNARD, Célestin (1857-1927)；アルジェリア総督であったティルマン TIRMAN は1881年にジョナルを官房長 chef de cabinet に任命し、ついでジョナルは内務省アルジェリア局長になる。1900年ヴァルデク＝ルソー首相は彼をアルジェリア総督に任命した。第3次、第4次ブリアン内閣の外相になり、1918年-1920年アルジェリア総督に復帰した。1921年ヴァチカン特任全権大使として教皇庁との関係修復に努めた。Ibid. pp. 150-151

(12) DUROSELLE, Jean-Baptiste ; *La France de la «Belle Epoque».* op. cit., pp. 328-329

の設置をもとめて譲歩の第一歩を得ようとするが、デルカッセはドイツを完全に無視し続けた。一方ドイツの側では画策を続ける。モロッコ政府にドイツに庇護をもとめるように説得する案も巨額の予算が必要となるから皇帝は支持しない。モロッコ沿岸を艦隊にデモンストレーションをさせる試みには、皇帝は挑発を嫌い反対する。そこで露仏同盟を破棄させて、フランス・ドイツ・ロシア大陸同盟を提案することを考えた。フランス側でもドイツとの対話を行うことを推奨する要人が少なくなかった。植民党のエティエンヌ、ルーヴィエ首相、外務省のポール・カンボンなどである⁽¹³⁾。

日露戦争から英仏間に亀裂が生まれ、フランスの同盟国ロシアとイギリスの同盟国日本の戦争は英仏協商を危機に陥れる。英仏の外交関係が揺れていた隙を狙いヴィルヘルムⅡ世はタンジール寄港を1905年3月31日と定めた。1月17日にドイツのフェズ公使は、スルタンがフランスに抵抗するための支持をドイツから得ることができると宣言した。そしてタイヤンディエの提案を拒否することをモロッコ政府に促した。蒸気船「ハンブルク」に乗ってヴィルヘルムはタンジールに上陸した。この時のドイツ政府の目標はドイツの威信を再確立し、フランスの企図を挫き、デルカッセを失脚させることにあった。スルタンはモロッコの領土保全を保障するドイツの援助を受け容れた⁽¹⁴⁾。

イギリスはデルカッセが辞任すれば英仏協商は終わってしまうと考えた。またイギリスはドイツの海軍基地がモロッコにつくられることを恐れていた。ルーヴィエは戦争を恐れ、外相に相談せず直接交渉した。ルーヴィエとエティエンヌとデュピュイは5月11日に皇帝特使のヘンケル・フォン・ドナースマルク Henckel von DONNERSMARCK と会見した。特使はデルカッセの辞任を求めた。6月6日のエリゼー宮での閣議で、ルーヴィエはデルカッセ外相を更迭した⁽¹⁵⁾。

(13) *Ibid.*, p. 329

(14) *Ibid.*, pp. 332-334

(15) *Ibid.*, p. 335

モロッコ問題の国際的解決を導くために、1906年1月15日から4月7日までスペインのアルヘシラスで国際会議が開かれた。ドイツは多くの列強から支持されると見積もった予想とは裏腹に、オーストリア-ハンガリー以外から支持を受けず孤立した。⁽¹⁶⁾ ルーヴィエ首相は「デルカッセ派」外交官のバレールやカンボン兄弟に後押しを受け元気を取り戻す。会議では港湾警察、モロッコ国立銀行、行政諸改革について話し合われた。国立銀行はフランス資本の優位が認められた。フランスは関税改革、公共事業、租税についての権利が認められた。港湾警察は国際化されずに、北部がスペイン、南部がフランスに割り当てられた。

アルヘシラス会談の後に独仏関係は小康の時代を迎えた。⁽¹⁷⁾ フランスの同盟国ロシアは1905年の敗北で軍がかなり疲弊し崩壊状態となっていた。フランスはイギリス並びにイタリアとの関係を強化する方針をとった。ドイツは巨大な艦隊を建設しつつあり、関心事はフランスではなく強大な海軍を持つイギリスに向かっていった。

凡庸な2人の首相ルーヴィエ、サリアンのあとに強力なリーダーシップを有していたクレマンソーが首相の座に就き、ステファン・ピション⁽¹⁸⁾ Stephen PICHON が外相任命された。クレマンソー首相は英仏協定の強力

(16) GUILLEN, Perre ; *L'Allemagne et le Maroc, de 1870 à 1905*. Paris. Presses universitaires de France. 1967. p. 880 ギランのこの浩瀚な博士論文は第1次モロッコ事件（タンジール事件）にいたるまでのモロッコでの独仏対立の背景となった主として経済的諸要因を詳細に分析し、政治・社会的要因についても論じた浩瀚な研究である。この時期の外交史については古い研究になるが ANDERSON, Eugene Newton ; *The first Moroccan Crisis, 1904-1906*, Chicago, The University of Chicago Press 1930. (reprinted by Archon Books Hamden, Connecticut. 1966) が詳しい。

なお第2次モロッコ事件（アガディール事件）についてはギランの研究と同様に独仏対立の背景を詳細に探ったアランの膨大なカイヨー研究3部作を構成する次の大部な研究を我々は手にすることが出来る。ALLAIN, Jean-Claude ; *Agadir 1911. Une crise impérialiste en Europe pour la conquête du Maroc.*, Paris. Publications de la Sorbonne. 1976.

(17) ANDERSON, ; *The first Moroccan Crisis, op. cit.*, p. 397

(18) ピション、ステファン、PICHON, Stephen (1857年-1933年)。1885年から1893年までセヌ県急進社会党の代議士。クレマンソーがパナマ事件で失脚後外交の世界に入

な支持者となり、外交面ではデルカッセは完全にしりぞけられた。この時期のフランスは国内政治が困難な時代を迎えており、外交に払う余力がなかった。国内での労働問題、特にフランス労働総同盟 CGT の労働攻勢に手を焼いていたからである。

3. 1905年の国際社会主義事務局 BSI へのヴァイアン・ジョレースの共同提案

フランス社会党 SFIO がリモージュ大会とナンシー大会で戦争を阻止するための具体的戦術を採択させようと急いだのは、1907年1・2月の総選挙で思いがけない大敗北を喫し、戦争阻止のためにゼネラル・ストライキと蜂起という手段まで行使すると決議に謳うことでドイツ帝国政府の弾圧を受けることを怖れたドイツ社会民主党 SPD 執行部が消極的で否定的な態度をとることを不安に思ったフランス社会党 SFIO が既成事実を突きつけようとしたからであった。⁽¹⁹⁾ 前回のアムステルダム大会とは立場をまったく変えて、フランス社会党 SFIO はジャン・ジョレース主導の下に、戦争阻止の行動に正面から取り組むことをドイツ社会民主党 SPD に迫ったのである。

この時前回のアムステルダム大会でのジョレースの発言が思い起こされるのである。

「…あなた方は自国のプロレタリアートのまえて国際的プロレタリアートの前であなた方の行動での無能さを覆い隠し、あなた方の傑出した同志カウツキーが精魂を枯らして提供する理論定式の頑迷さに逃げ込んでいるのであり⁽²⁰⁾ます。」

り、1906年にジュラ県から元老院議員に選出された。第1次クレマンソー内閣と第1次・第2次ブリアン内閣の外相を務めた。1813年にバルトゥ内閣で外相に返り咲き、3年兵役法可決に貢献した。第1次世界大戦中にはボワンカレ大統領とクレマンソーとの和解を仲介し、第2次クレマンソー内閣成立に尽力し、ヴェルサイユ講和条約に調印した。PIERRARD ; *Dictionnaire de la Troisième République. op. cit.*, pp. 196-197

(19) HAUPT, Georges ; *Le congrès manqué. op. cit.*, p. 24

(20) *Sixième Congrès Socialiste International tenu à Amsterdam du 14 au 20 août 1904. Compte rendu analytique.* Bruxelles. Le Secrétariat Socialiste International. 1904.

ジョレースはドイツ社会民主党 SPD の理論的非妥協性が、行動と実践での無力を覆い隠す方法と手段であり、行動上・実践上の無力さは理論的な頑なさの裏返しであるというのである。

ジョレースはヴァイアンと共同で1905年9月に国際社会主義事務局 BSI に各国の社会党が検討してもらう項目として以下のことを提案した。

「秘密裏にであれ公然としてであれ突発事 événements が政府間の紛争を起こしかねない、戦争が起きうるそして避けがなくなった時にすぐに」「戦争を防止し阻止するために採るべき一般的な諸手段 les mesures générales à prendre

- 1) まず関係各国によって採られるべき諸手段
- 2) 同時に社会主義者と労働者の協調した行動のために国際的社会主義政⁽²¹⁾党によって採られるべき諸手段」について明らかにする。

この提案は1906年3月6日の国際社会主義事務局会議で審議され採択された。この決定は次回インターナショナル大会すなわちシュトゥットガルト大会の議事日程で「軍国主義と国際紛争」という議題で取り上げられることになった。

第2章 フランス統一社会党（労働者インターナショナル・フランス支部 SFIO）第3回リモージュ大会と2つの課題

フランス統一社会党 SFIO 第3回大会は1906年11月1日から4日までの4日間リモージュで開催された。これ以降リモージュ大会として知られるこの大会では、第2インターナショナル・シュトゥットガルト大会での議論の

p. 81

(21) *Répertoire*, du Bureau Socialiste International. no 413, cité par HAUPT, Georges ; *La Deuxième Internationale. 1889-1914. Étude critique des sources. Essai bibliographique*. Paris. La Haye. Mouton. 1964. p. 60

焦点となった「軍国主義と国際紛争」とならんで、政党と労働組合の関係についての議題が焦点となった。直前の10月8日－16日にアミアンで開催されたフランス労働総同盟 CGT 第15回大会で労働組合の政党からの自律を謳ったいわゆる「アミアン憲章」⁽²²⁾を制定したからである。この憲章が採択される過程での議論では労働組合に対する政党の主導権を主張した繊維労働組合 Fédération du Textile 書記長ヴィクトル・ルナール Victor RENARD は圧倒的多数のいわゆる革命的サンディカリストに対して惨憺たる敗北を喫する。ルナールは1905年に社会党の統一を加わったマルクス主義を標榜するゲード派の活動家であった。ゲード派の敗北は労働組合の分野だけにとどまらなかった。統一社会党 SFIO 内部でゲード派とともに多数派を形成していたヴァイアン派（両派はミランの入閣に反対する反入閣派の左派ブロックを形成していた）は政党と労働組合の対等の関係を支持してジョレース派とともにあらたな党内多数派となり、ゲード派グループによる政党による労働組合の指導と従属を主唱するノール県連合の提案をしりぞけ、ジョレース派の労働組合の自律と政党との対等の関係を支持するタルン県連合の提案を可決させた。ゲード派は二重の敗北を喫することになるのである。

フランス労働総同盟 CGT の歴史的経緯をたどれば、ゲード派の傘下にあった全国労働組合連盟 Fédération nationale des syndicats が「ゼネラル・ストライキ」問題をめぐり混乱して解体した後を受けて、労働総同盟は1895年リモージュ大会で創立された。一方本来労働者の相互扶助や職業訓練、職業紹介などの機能を担った労働取引所 Bourses du travail の全国組織である労働取引所連盟 La Fédération des Bourses du travail は1892年にサン＝エティエンヌ Saint-Étienne 大会で労働総同盟 CGT 結成に先だって創立されていた。労働取引所には1880年-1890年代のラヴァシヨル RAVACHOL などのア

(22) アミアン憲章 Charte d'Amiens については我が国でもこの憲章自体については語られることが多いが、この憲章が制定される背景や、労働総同盟 CGT アミアン大会での議論についても検討されることが必要であろう。例えばアミアン大会の背景については清水克洋著「オギュスト・クフェル考序説」商学論纂、第57巻、第1・2号、中央大学、2015年、137-165頁などの論稿がある。

ナーキストによる「事実によるプロパガンダ propagande par le fait」すなわち爆弾テロなどが行き詰まった後に、フェルナン・ペルティエ Fernand PELLOUTIER などのアナーキストは⁽²³⁾大挙して労働組合に加入していわゆる「革命的サンディカリズム」の拠点とした。1902年のモンブリエ大会で労働総同盟 CGT と労働取引所連盟の統一によって「革命的サンディカリズム」の路線は、新労働組合ナショナルセンターとなった労働総同盟 CGT に引き継がれる。「革命的サンディカリズム」は議会主義に傾斜した社会主義政党から自律し、労働者の「直接行動 action directe」の究極の表現である「ゼネラル・ストライキ」によって革命を達成して労働組合を基礎とした階級のない労働者の社会を樹立しようとするイデオロギーであった。この革命的サンディカリズムの「直接行動」に影響を与えたのではなく、それから啓発を受けたのがジョルジュ・ソレル Georges SOREL の「暴力論 Réflexions sur la violence」であった。ソレルは「暴力」を倫理的・道徳的に正当化できる「神話 mythe」であると位置づけた。

一方革命の方法としての「ゼネラル・ストライキ」の理論を生み出したのは革命的サンディカリズムの生みの親だとされてきたフェルナン・ペルティエであり、その理論的基礎付けを行ったのはその頃は貧しいアナーキストの法学生であったアリストイド・ブリアン Aristid BRIAND⁽²⁴⁾であった。

(23) フェルナン・ペルティエについてはジャック・ジュリアルの極めて詳細な次の研究がある。JULLIARD, Jacques ; *Fernand Pelloutier et les origines du syndicalisme d'action directe*. Paris. Éditions du Seuil. 1971

(24) ブリアン、アリストイド BRIAND, Aristide (1862年-1932年) ナントでカフェを経営する両親のもとに生まれた彼は1883年パリに出て、代訴人 avoué になるために法学を学んだが、1884年故郷のナントに戻り「ラ・デモクラシー・ドゥ・ルエスト La Démocratie de l'Ouest」紙の記者となる。そこで革命的サンディカリストの理論的指導者ペルティエと出会い、彼の影響のもとに「ゼネラル・ストライキ」の理論を確立した。1886年から1892年までサン・ナゼール Saint-Nazaire 裁判所弁護士修習生を務め、1889年の総選挙に立候補したが落選。翌年からナント裁判所の弁護士となった。1893年にパリに出てポントワズ裁判所の弁護士となる。1883年総選挙、1896年補選、1898年総選挙と続けて落選した後1902年総選挙で「社会主義共和連合 Union des socialistes et des républicains」の候補としてロワール県サン・エティエンヌ Saint-Étienne 第1区か

ペルティーエは1901年に夭折し、ブリアンはサリアン内閣に入閣して統一社会党から離脱した。彼は改良主義的社会主義者としての立場は放棄したが、両大戦間期には平和主義的外交方針を推進する政治家として活躍し合計11期にわたって内閣を担った。

社会党による支配も指導も峻拒して自らの「直接行動」すなわち「ゼネラル・ストライキ」によって革命を達成しようとしていたフランス労働総同盟 CGT は、マルクス主義理論に寄って立つゲード派のノール県を拠点とする繊維労働組合連盟書記長ヴィクトル・ルナールの社会党の労働組合に対する指導性を認めることをもとめる提案をしりぞけて「アミアン憲章」を圧倒的多数で可決した。この憲章は突然に労働総同盟によって打ち出されたわけではなく、創立以来の社会主義者たちとの長期間の論争を経て制定された文書であり、1906年10月8日から13日までの6日間に及んだフランス労働総同盟第15回大会の日程のうち10月11日から10月13日の3日間を費やして激論が戦わされた後に圧倒的多数の賛成で可決された憲章であった。ゲード派の繊維労働組合連盟は、総同盟執行部支持派の圧倒的多数を前に棄権にまわった。⁽²⁵⁾採決の結果は賛成830票対反対8票、白票1票で「アミアン憲章」は採択された。⁽²⁶⁾

労働総同盟アミアン大会で激論が戦わされた政党と労働組合の関係につ

ら立候補して初当選し、その後もこの県から連続当選を果たした。入閣支持派社会党の書記として党の統一をもとめ1905年の統一大会には参加し、次のシャロン大会の1ヶ月後、党と党議員団に入った。しかし1906年3月14日にサリアン Sarrien 内閣の公教育大臣を引き受けて、党を離れた。その後11回首相となり、長期にわたって外相も務めた。ロカルノ条約締結に貢献したとして1926年にシュトレゼマンとともにノーベル平和賞を受賞した。MAITRON ; *Dictionnaire biographique du mouvement ouvrier français* t. 11. pp. 55-56 参照。

(25) Confédération Générale du Travail ; *XV^e congrès national corporatif. (IX^e de la Confédération) et la conférence des Bourses du Travail tenu à Amiens du 8 au 16 octobre 1906. Compte rendu des Travaux.* Amiens, Imprimerie du Progrès de la Somme. p. 170 棄権の票数は議事録に記されていないが総議決権数は993票であった。

Ibid., p. 78 おそらく142票の棄権票があったことになる。

(26) *Ibid.*, p. 171

いての議論は、フランス社会党 SFIO 第 3 回リモージュ大会でもゲード派の繊維労連書記長ヴィクトル・ルナールとゲード自身を含めた論争としてくり返された。この時の論争は労働組合が政党の指導に服するべきであると主張した事実上のノール県連合の提案（アリエ県の代議員シャルル・デュマ⁽²⁷⁾ Charles DUMAS によって提出されたことから「デュマ案」と呼ばれた）と労働組合の自律を認めて対等の協力関係維持を主張するジョレース主導のタルン県連合案の二つをめぐって展開された。2つの案が採決に付されタルン県連合案⁽²⁸⁾148票、デュマ案⁽²⁹⁾（ノール県連合の直接の提案ではないのでノール

(27) デュマ、シャルル、DUMAS, Charles (1883年-1955年)。弁護士。ジャーナリスト。アリエ県の代議員。ブルジョアの育ちであったが、学生時代にパリで社会主義運動に参加し、休養先のクルーズ県で運動を組織してクルーズ県社会主義運動の生みの親となる。1910年にアリエ県の代議員に選出されたが、次の1914年の総選挙では落選した。第1次大戦開戦後にゲード無任所大臣の官房長に、1936年の人民戦線ブルム内閣のマックス・ドルモワ Max DORMOY 内務大臣の官房長となった。MAITRON ; *Dictionnaire biographique du mouvement ouvrier français*. t. 12, op. cit., p. 99 シャール・デュマはリモージュ大会にはアリエ県の代議員として参加し、ゲード派の社会党と労働総同盟 CGT の関係についての「デュマ案」を提出した。ゲード派には最大にして最強のノール県連合の提案としてではなく、この時のアリエ県案として、また同じく次回ナンシー大会での反軍国主義・反戦平和についての決議案はこの大会でノール県連合決議案をドルドーニュ案として党大会に決議案を提出している。ノール県連合だけのゲード派と見られることを回避したかったか、他にも拠点の県連合があることを誇示したかったのかは詳らかでない。

(28) リモージュ大会で可決されたタルン県連合案の文面は以下の通りである。

「労働者階級は政治的行動と労働組合の行動の結びついた力によってしか、ゼネラル・ストライキにまで行き着くサンディカリズムによってしか、そして資本主義の全体的収奪を目指す政治権力そのものの征服によってしか完全には解放されないことを確信し、この二重の行動が政治組織と経済組織がそれらの完全な自律を持つにより効果的であることを確信し、政党に対するサンディカリズムの独立を確認し、同時に社会主義のみが政党として承認し追求する目的をサンディカリズムに割り当てたアミアン大会の決議を公式に認めて、このプロレタリアートの政治行動と経済行動の根本的一致が必然的に混乱も従属も不信もなく二つの組織の間での自由な協力をもたらすことに鑑み、労働総同盟と社会党の誤解をことごとくはらすために最善を尽くすことを活動家たちに求める」 Parti Socialiste (Section Française de l'Internationale Ouvrière ; 3^e Congrès National tenu à Limoges les 1^{er} 2, 3, et 4 Novembre 1906. *Compte Rendu analytique*. Paris. Au Siège du Conseil National, 1907, pp. 201-202

県連合案とも、しかし提案者が所属するアリエ県連合案とも呼ばれず、提案者の名前で呼ばれた）130票、棄権9票でタルン県連合案が採決された。タルン県連合案にはヴァイアン派が主導するセーヌ県連合の圧倒的多数（34票中25票）と主に南フランスの県連合などの票が投じられ、デュマ案にはノール県連合の全部の票である42票とアリエ県連合、ドルドーニュ県連合などゲード派の拠点の県連合の票が投じられた。

票差は僅差であったが、ヴァイアン派とジョレース派はこれ以降フランス社会党内の多数派を形成するようになり、これ以降長い間続いたミルラン入閣反対の左派グループとしてのゲード派とヴァイアン派の蜜月時代は終了する。

第3回リモージュ大会での「タンダンス *tendance*（傾向）」と呼ばれる社会党内の分派の内訳を見れば、多数派のヴァイアン派とジョレース派の連合が最大の勢力となる。教条的マルクス主義の理論にあくまで固執して労働組合の自律性を否定し、反教権主義のヴァイアン派の理論を十分に尊重せず、さらに決定的なことには反軍国主義と反戦平和の問題を反教権主義に対してと同様に、社会党にとって本来の究極目標である社会主義革命から目をそらす派生的問題としてしか理解しなかったためにヴァイアン派をジョレース派の側に追いやって党内で孤立した元フランス労働党 POF=ゲード派が第2の勢力となる。あらたに誕生した第3の分派は反愛国主義を標榜して軍隊の内部からの武装蜂起を唱え、他国から侵略された場合の祖国防衛さえも侵略戦争と防衛戦争の区別は不可能である（しかし相手側の労働者は必ず蜂

(29) ノール県連合の提案と称しても差し支えないデュマ案の文面は以下の通りであった。

「自らを組織し活動し、職業的領域 *le terrain corporatif* では労働組合として政治的領域では社会党として自らを組織し活動する同じ階級であり同じプロレタリアートであることにかんがみ、そして同じ階級の2つの様式の組織と行動は目標と手段が一体とならずに、区別され、そのままでとどまるならば、たがいに無視し、たがいに回避して、ましてやたがいに敵対するならば、プロレタリアートが自分自身と致命的に分裂し、プロレタリアートの解放を不可能にすることをかんがみ、大会は状況に従って労働者の労働組合の行動と政治的行動が協力し合い、たがいに結びつくように配慮をしてしかるべきであると宣言する。」 *Ibid.*, p. 201

起することを前提とする)として否定するギュスターヴ・エルヴェを指導者とするエルヴェ派であり、この3つの分派が党内でとりわけ反軍国主義や反戦平和主義の問題をめぐる熾烈な党内闘争を展開する。多数派=主流派を形成するヴァイアン派とジョレース派をかたく結びつけたのは、国家の政教分離を実現することを目指す反教権主義と、そしてそれにもまして反軍国主義と反戦平和主義の行動であった。

反軍国主義と反戦平和主義のテーマについての討論は最終日である大会第4日目11月4日日曜日に議事日程に従って行われた。議事日程のテーマは「諸国民；軍国主義と戦争、労働者の国際的行動；社会主義と祖国
Les nationalités ; le militarisme et la guerre ; l'action internationale des travailleurs ; le socialisme et la patrie」とされた。この議事日程にはじめに極左派のギュスターヴ・エルヴェが論壇に立ち、ヨンヌ県連合の決議案ととりわけ自説の反愛国主義を弁護する論議を繰り広げた。ヨンヌ県連合＝エルヴェ派の提案はこのリモージュ大会でも次回のナンシー大会でも10%余の支持しか得られずに多くの批判を浴び、そしてインターナショナル・シュトゥットガルト大会では提案は認められたが、さらに孤立を深め、最終的に採択された小委員会決議には彼らの主張はまったく取り入れられなかったが、この3つのいずれの大会でも台風の目ともしくはもめ事の種となり反発を呼び起こした。エルヴェは「祖国は貧者にとって母親ではなく継母であります⁽³⁰⁾」という彼特有の言い回しで愛国主義を否定する。そして「我が祖国は我が階級です⁽³¹⁾」と言い切る。さらにエルヴェは侵略的戦争と防衛的戦争を区別できないと主張した。1870年の独仏戦争でも、ポア戦争でも、日露戦争⁽³²⁾でもいつも自分の側が防衛戦争を行っていると思った、と彼は言う。そしてヴァイアンの決議案（セヌ県連合決議案）には祖国の防衛を肯定する「第1動議」には反対するが、ゼネラル・ストライキと労働者階級の蜂起を提起

(30) *Ibid.*, p. 215

(31) *Ibid.*, p. 215

(32) *Ibid.*, p. 218

する「第2動議」には諸手を挙げて賛成するとエルヴェは表明した。⁽³³⁾

これに対しヴァイアンはエルヴェの言う「軍隊内ストライキ grève militaire」は既にインターナショナル・ブリュッセル大会でオランダのドメラ・ニーウェンハイス Domela NIEUWENHUIS が提案し圧倒的多数で否決されたと指摘する。祖国防衛を否定するエルヴェに対し、ヴァイアンは「国民は事実であります。この環境の中で一国の労働者は進化し、この枠内で各国の労働者階級は階級意識を獲得し、内外の支配者に対する防衛と闘争において他の諸国の労働者階級と連帯していると自覚するのです⁽³⁴⁾」と主張して労働者階級にとっての祖国と自国民の重要性を強調した。さらに最近急速に増大する社会党とインターナショナルの勢力によって日露戦争に対するフランスの中立を維持させロシアの戦争に巻き込まれることを防ぎ、モロッコ問題ではドイツとフランスの戦争を未然に防ぐことが出来たのであり、この力を行使して戦争を阻止することを強く説いた。⁽³⁵⁾⁽³⁶⁾

ヴァイアンの発言の後、神経生理学と人類学の権威ラピック LAPICQUE⁽³⁷⁾も発言し、エルヴェの発言を人類学的に分析して、エルヴェの反愛国主義は農民の革命以降の伝統的徴兵忌避の感情と同じく社会主義的ではないと批判し、ヴァイアン提案を支持した。

ゲードは繰り返さう主張する。反軍国主義の運動は社会革命によって戦争の根源である資本主義を廃絶すれば戦争はなくなるのであるから、革命という労働者の本来の使命からそらせる結果になる。新しい論点といえば開戦時には蜂起は不可能になる。たとえ蜂起が可能であっても、敵に予め蜂起の

(33) *Ibid.*, p. 218

(34) *Ibid.*, p. 222

(35) *Ibid.*, p. 223

(36) *Ibid.*, p. 224

(37) LAPICQUE, Louis, Edouard (1866年-1952年) ; 神経生理学者、人類学者。医学博士。パリ大学教授。フリーメイソン。ヴォージュVosges 県の社会主義運動の先駆者となって社会党統一後にヴォージュ県連合結成に貢献した。第2次世界大戦中はレジスタンス運動に加わり逮捕される。MAITRON ; *Dictionnaire biographique du mouvement ouvrier français*. t. 13, pp. 199-200

時期を知らせれば弾圧を招くだけである、という論点⁽³⁸⁾だけであった。

ジョレースはエルヴェの反愛国主義の論拠が矛盾しているとして次のように主張する。「私はエルヴェが彼の方法の非実現性 *impraticabilité* について表明した事細かな反論には立ち戻りたくはありません。その反論は幾度か変えられましたが彼の説には根源的欠陥が、根本的矛盾があります。あなたは諸国民の独自性を軽視し、私たちはあなたがその間違った考えを流布させているとして非難しているのであって選挙のために思って批判しているのではありません。その証拠には選挙が過ぎ去っても選挙以前と同じに力強く、明確にその考えをしりぞけています。矛盾はとりわけ次の点に潜んでいます。戦争が布告され動員命令が届きます。フランスの市民たちは権力を獲得するために、たぶん社会主義的な性格を持った蜂起を宣言します。かくしてあなたたちは労働者の革命的で社会主義的なフランスから宣戦布告を引き出します。あなたたちは外敵からフランスを守るために 3 重の義務を自らに課します。あなたたちはこうして外からの抑圧に奇妙な特権を打ち立てて侵略を甘んじてうけいれます。あなたたちは資本家の暴君政治の重圧の下にあるプロレタリアートに外国の暴君政治のあらたな重圧を加えます。われわれの歴史時代にプロレタリアートは征服に屈服します。征服者は沈黙と受動性と無気力をのぞむのです。彼らはそうさせるための算段⁽³⁹⁾をとります」。「だからこそ私たちはあなたたちの教義を社会主義にとっていまわしい労働者階級にとっ⁽⁴⁰⁾ていまわし反革命として教義としてしりぞけるのです」。ジョレースはエルヴェが祖国をないがしろにし、国民国家の枠組みを認めないことを非常に危険であると受けとめ、彼の理論を社会党にとって受け入れられないものだと考えた。なぜならば、祖国と国民を認めないことによって侵略戦争と防衛戦争の区別や、紛争の仲裁さえもが不可能となるからであった。そして祖国防衛を否定することは外国の侵略を甘んじて受けることを認めることに

(38) *3e Congrès National. Compte Rendu analytique. op. cit.*, p. 241

(39) *Ibid.*, pp. 251-252

(40) *Ibid.*, p. 252

なるのである、と指摘する。大会では発言者がエルヴェの思想とヨンヌ県連合決議案の矛盾を次々と指摘する。エルヴェは防戦に大わらわとなるが、極めて図式化された単純な自分の理論への確信は揺るがない。

提案された順番に決議案の文面を以下に引用する

「ヨンヌ県連合提案」の文面は次の通りである。

「大会はプロレタリアを搾取する資本家たちが彼らに国民と政府のレッテルを貼るなどはまったく問題外であり、労働者階級の利益はまごうことなく国際資本主義に対する闘争であり同じ国のすべての住民間の利益共同体の存在があるといつわるブルジョアと政府の愛国主義を拒み、すべての国の社会主義者の義務は集産主義と共産主義体制を樹立するためにのみ闘い、ひ

(41) 第2インターナショナル・シュトゥットガルト大会に向けての決議文の中では各派は「革命的」表現を競い合って使用する。特に共産主義とか集産主義という文言が多用される。しかしこの時期における共産主義はどのようなイメージで社会主義者に解釈されていたかについては意外と詳らかにされてこなかった。ところでロシア革命以前に共産主義とは以下に解釈されていたのか？ 社会主義についてはどうか？ 第2インターナショナル時代に解釈されていた共産主義と社会主義の違いはどのようなものであったかについて一言しておきたい。

今日的意味で社会主義という語が使用されたのは1832年と1833年のサン・シモン派とフーリエ派の機関紙（サン・シモン派の「ル・グローブ Le Globe」紙とフーリエ派の「ファランステール Le Phalanstère」紙においてであると言われる）。WILLARD, Claude ; *Socialisme et communisme français*. Paris, Armand Colin. 1978. p. 7

共産主義の起源についてさかのほれば、プラトンや中世の政治思想にたどり着くであろう。ここではカンパネラ「太陽の都」やトマス・モアの「ユートピア」のキリスト教的倫理観に基づいている中世の共産主義についてはあえて除外する。19後半と20世紀初頭の社会主義者は中世の共産主義思想からはまったくと言って良いほどに影響を受けていなかった。

次に啓蒙主義のエルヴェシウスやルソー、マブリ MABLY、そしてモレリ MORELLY の「自然の法典 Le code de la nature」などの共産主義観すなわち平等主義への熱情は、バブーフなどのフランス革命期の共産主義思想の誕生の先駆となった。第2インターナショナル期の社会主義者はバブーフに多く言及しており、バブーフからオーギュスト・ブランキを経由して社会主義と共産主義思想をイメージしたであろうし、オーギュスト・ブランキの思想はこの時代においてエドゥアール・ヴァイアンとヴァイアン派によって引き継がれた。彼らはマルクス主義思想とブランキ主義の折衷によってヴァイアン派の社会主義観を形成した。そして彼らは経済決定論に裏打ちされた教条的

マルク主義者ゲード派と提携してミルランの入閣主義に反対した。その他社会改良主義と自治体社会主義のポール・ブルースのポシビリストや労働者の運動を優先した労働者中心主義 *ouvriérisme* のアルマヌ派などの潮流がパリ・コミューンから第 1 次世界大戦の間のフランス社会主義運動に勢力を持っていた。

ここではフランス革命以降の社会主義と共産主義の定義と歴史的な文脈を簡潔に跡づきたい。この時代の共産主義思想はレーニンの「国家と革命」に定式化された共産主義でも、ましてやスターリンの「レーニン主義の基礎」に図式化・ドグマ化されたそれでも勿論なかった。また第 2 インターナショナル大会に参加したレーニンの共産主義思想は当時まったく知られていなかったし、評価もされていなかった。

エンゲルスは『共産党宣言』の序文で「1847年には、社会主義はブルジョアの運動を意味し、共産主義は労働者の運動を意味した」と指摘している。サン・シモンやフーリエについてはこの言葉は当てはまるが、ではブランキ派はブルジョアのデクラッセ（階級脱落者）の運動ではなかったか。

それはともかく、この時代の共産主義とは社会主義に対してどのような点で相違していたと同時代の社会主義者は考えていたのか。クロード・ヴィラルーの指摘（*Ibid.*, pp. 29-30）によれば次の 3 点で共産主義と社会主義は異なっていると見られていた。

第 1 に共産主義はフランス革命の遺産を継受して、民主主義的であり共和主義的であった。その点で民主主義に反対し非政治的で彼らのユートピアを実現するためには政府の援助をも厭わなかったサン・シモン、フーリエ、プルードンたちとは大きく異なっていた。しかしルイ・ブランとラムネーの社会主義となるとそれほどの溝はなかったであろう。

第 2 の点は、社会主義者は一致して改良主義的・平和主義的手段を推奨して、暴力の行使には強く反対していた。共産主義はジャコバン主義とバブーフ主義の伝統に忠実で、革命的手段を肯定したが、例外的に「イカリーへの旅」の著者エティエンヌ・カベールは暴力の使用を拒絶していた。

最後の第 3 の点であるが、社会主義の理論家たちは未来の共同社会を構築しようと努力した。共産主義者たちは現実社会の中で秘密結社を構成し、指導者や活動家として運動を展開していた。

それゆえ社会主義者は同質の集団であったのに対し、共産主義者たちは民主主義的で改良主義的で理論的なカベールのような一派と、民主主義的であるが革命的で唯物主義的であるブランキやネオ・バブーフ主義者デザミ DÉZAMY のようなこれとは異なるグループとに分かれていた。

第 2 インターナショナルの時代には各国の支部は社会党もしくは社会民主党と党名を名のっており、社会主義の根本原理となる生産手段の集団的所有を社会主義的所有とも共産主義的所有ともあるいは集産主義的所有とも呼んでおり、厳密な定義による区別はなかったと見て良い。ちなみにゲード派は自らを集産主義者 *collectivistes* と称していた。おそらくは改良主義的社会主義者のブルース派=ポシビリストとは異なり自派が明確に生産手段の集産主義的・社会主義的所有を目指していることをあらわすためにこの

とたび樹立するのに成功した場合体制を守ることを確認して、各方面でヨーロッパの平和を乱そうと脅かす外向的紛争を目前にしてあらゆる市民が、何事があるとも軍のストライキと蜂起による戦争の布告でこたえることを求める。⁽⁴²⁾」

次に提案された「セーヌ県連合提案」は二つの文面に分けられていた。

「セーヌ県連合大会は次のように提案する。

1° 問題が議論された場合は即時に採択し、議論されなかった場合にはそれらを各県連合の検討に付託して次の全国大会に提出するためにリモージュ大会に提案する。

2° シュトゥットガルト国際大会に提案する。」

「第1動議

大会は以下のことのためにこれまでの国際大会の諸決議をあらたに確認する。

1° 労働者階級を資本家階級の経済的政治的軛に繋ぎ止めておくため政府

呼称を用いたのであろう。ポリシェヴィキが共産党と名乗ったのは上記のフランスでの思想的系譜と関係なく第2インターナショナル時代の社会党とレーニン主義に基づく自らの立場を区別するためであったといえる。

ついでに指摘しておけば「プロレタリアート独裁 la dictature du prolétariat」の理論と思想はフランス革命期の共産主義者バプーフの「革命的独裁」の思想を受け継いだオーギュスト・ブランキが「プロレタリアート独裁」を彼の革命以降の移行期の理論の中核部分とした。彼のこの理論は19世紀半ばの社会主義者・共産主義者に影響を与え、マルクスとエンゲルスはブランキの影響を認めながら彼らも「プロレタリアート独裁」という言葉を使ったが、「前衛政党」としての共産党一党独裁と「プロレタリアート独裁」を同一視するようになったのはレーニンが『国家と革命』を著して以降のことである。普通選挙制度を勝ちとり議会を通じて政治権力を獲得しようと考えようになった第2インターナショナルの理論家たちはこの理論から距離をおき、カウツキーはレーニンの「プロレタリアート独裁」理論はマルクスの理解と異なっていると指摘し（Die Diktatur des Proletariats, 1918）、ロシア革命を支持したローザ・ルクセンブルクでさえロシアの政治体制には批判的であった（Zur russischen Revolution, 1918）。レオン・ブルムは1920年のトゥール大会でレーニンの「プロレタリアート独裁」は「プロレタリアートへの独裁 dictature sur le prolétariat」であると批判した。「プロレタリアート独裁」については別稿でより詳しくのべたい。

(42) 3^e Congrès National. op. cit., p. 260

によって組織された武器以外の何者でもない軍国主義と帝国主義に反対する行動を支持する。

2° 一国の政府は外国の国民の独立を脅かすならばこの国民と労働者階級そして国際的労働者階級に害を加えること、脅威の下におかれた国民と労働者階級は彼らの独立と自律をこの侵害から守ることが絶対的義務であり、他のすべての労働者階級の協力を求める権利があること、反軍国主義政策と社会党のひたすら防衛的な政策はこの目的を果たすためにブルジョアジーの非武装化と労働者階級の人民総武装による武装を追求することを労働者階級に命じていることをあらゆる国の労働者階級に喚起することを支持する。

第 2 動議

大会はこれまでの国際大会と国際事務局の諸決議を確認して、すべての国のプロレタリアと社会主義者の国際連帯は彼らの第一の義務と考えて 5 月 1 日（メーデー）に国際連帯と最初の必然的結果である毎年国際平和の維持のために示威行動を行うことを彼らに呼びかける。

そして生まれかけているロシア革命と追いつめられたツァーリズムを目前にして近隣の帝国主義がそれを救おうとしている時に、やむことのない資本家と植民地のための諸々の企てと略奪行為を前に国際事務局と列国議員会議が、差し迫る国際紛争の場合にすべての国の社会党の同意のもとに代表を招集して必要な諸措置をとって実行に移し、紛争を予防し阻止する諸手段を決定できるようにする。

これらの諸決定を全国的国際的社会主义労働者組織によって準備され秩序立てられ練り上げられた行動を実行可能とするように求め、その行動を各国において先ずは関係国においてで活動の状況次第では労働者階級と社会党の全エネルギーと全労力をすべての手段によって戦争を予防し阻止するために行使する、その手段とは議会での行動と公共の場での騒擾、民衆の示威行動から始まって労働者のゼネラル・ストライキと蜂起までである。⁽⁴⁴⁾

(43) 列国社会主义議員委員会を指す。詳しくは注(59)を見よ。

(44) *Ibid.*, pp. 260-262

ノール県の提案は反軍国主義の運動には限界があり、おおもとの資本主義を廃止しない限りは戦争を廃絶することが出来ないとする提案であり、すべては資本主義の廃絶によってしか解決できないと主張する。反軍国主義や反教権主義はそれからの逸脱であるとするゲード派の教条的マルクス主義理解に由来している。その文面は以下の通りである。

「ノール県連合の提案」

「大会は、いかなる国際的殺戮をも受け入れないと決心した労働者に、宣戦布告を待ってそれに対して遅ればせで問題のある蜂起を対置するよりもよりよいやり方があると呼びかける。労働者たちは、戦争が利益の源泉であり、政府が彼らの数と力を頼りにする敵である資本家ブルジョアジーがことを始めるのを待つのではなく、平和の最良の保障であるとともに彼らの完全で決定的な解放の道具である、彼らの手に入るであろう政治権力を掌握するべきであると呼びかける。

大会はさらにシュトゥットガルトで本質的に戦争と軍国主義は資本主義体制の当然で必然的な結果であり、この体制自体が消滅しない限りなくならないとする国際大会の諸決議 (1889年パリ、1891年ブリュッセル、1893年チューリヒなど) をよりどころにすると決定する。その結果平和を擁護し軍国主義に反対する (軍国主義と戦争を主眼とすることに立ち戻らない) 唯一の運動は資本主義を解体するための全世界の労働者を組織する社会主義者の運動である。その間にも社会党がその国際的行動として実行すべきは、国際的に追求される兵役期間の短縮と陸軍・海軍・植民地予算の同時的拒否であり、常備軍に代わる全人民の武装である。⁽⁴⁵⁾」

詳しくは第3章で述べるが、注目すべきはゲード派=ノール県連合がエルヴェ派の国民国家防衛を否定する反愛国主義を拒否している点でセヌ県連合提案の第1動議を評価し、戦争阻止の手段としてゼネラル・ストライキや蜂起までを提起する第2動議に否定的であるのにたいし、これとはまった

(45) *Ibid.*, p. 262

く正反対にエルヴェ派=ヨンヌ県連合は反愛国主義を否定している点で第 1 動議を評価しないのに対し、ゼネラル・ストライキや蜂起を行動提起する第 2 動議を受け入れる。翌年の統一社会党第 4 回ナンシー大会での採決の際に第 1 動議と第 2 動議を分離して採決する提案が可決されたために、この相違点は党内の勢力分布を明確に表面化させる。

しかし第 3 回リモージュ大会では 3 つの決議案をそれぞれ個別に賛成票のみの投票で評決したためにセーヌ県連合の提案をめぐる詳細な勢力図は明確にはならなかったし、反対票は投じられなかったために各県連合の微妙な態度を知ることが出来ないが、逆にセーヌ県連合提案、ノール県連合提案、それにヨンヌ県連合提案の 3 提案に対する各県連合の立場と数的規模は、重複する賛成投票は認められなかったことによって明確化された。

第 3 回リモージュ大会での委任による投票総数は 285 票で、絶対多数は 143 票であった。セーヌ県連合提案は唯一絶対多数を上まわる 153 票の賛成票が投じられた。ついで賛成票多かったのはノール県連合提案の 98 票で、ヨンヌ県連合の票は 31 票であった。これに加えて棄権票は 1 票もなく、欠席が 3 票で合計ちょうど 185 票であったからこれによって重複する賛成投票は無かったことが判明する。セーヌ県連合にゲード派やエルヴェ派の少数派も存在したが、県連合大会の決定に従ってセーヌ県連合の 36 票はすべてセーヌ県連合提案に投じられた。セーヌ県連合への賛成票はセーヌ県連合のほか、ガール県連合 (12 票) をはじめとする地中海沿岸南仏の諸県連合やパリ地方の諸県連合、ジョレースのタルン県連合 (5 票) など全国的に分布していた。これに対しノール県連合提案への支持はノール県連合 (42 票) が圧倒的に多く、同じ北部地方のパードーカレー県連合とシャンパーニュ地方のオーブ県連合、リヨンがあるローヌ県連合から 6 票が、そしてゲード派の伝統的拠点であるアリエ県連合とドルドーニュ県連合から 4 票が主だった支持票であった。ヨンヌ県連合提案への支持票はヨンヌ県連合のほかマルセイユがあるブッシューデューローヌ県連合 (7 票) をはじめとする地中海沿岸南仏の諸県連合からの支持が目立つ。⁽⁴⁶⁾

第3章 フランス統一社会党（労働者インターナショナル・フランス支部 SFIO）第4回ナンシー大会と反戦平和の問題

フランス統一社会党第4回ナンシー大会はインターナショナル第6回シュトゥットガルト大会の直前に開催された。ナンシーが開催地に選ばれたのもシュトゥットガルトに近くて交通の便も良く移動しやすいことが理由だった。インターナショナル大会のフランス代表は、ナンシー大会が終わるとすぐにこの大会で可決された反戦平和についての決議を持ってシュトゥットガルトに急ぐ予定であった。

ナンシー大会での軍国主義と反戦平和についての討論は大会2日目である8月12日月曜日午後の全体会議から始められた。議題名は「軍国主義と国際紛争 Le militarisme et les conflits internationaux」とされた。ゲード派からは、前大会で否決された「ノール県連合提案」をいくつかの箇所を訂正して、わかりにくい言い回しをより平明に書き換え、ゲード派の拠点県連合の一つであるドルドーニュ県連合からの提案として提出された。この提案は「ドルドーニュ県連合提案」と称される。

大会第2日目8月12日午前の部ではヴァレンヌ VARENNE 議員が行った議員グループの報告についての議論から始められた。ユダヤ系ロシア人でフランスに帰化したゲード派のシャルル・ラポポール Charles RAPPOPORT が最初に壇上に立ち、クレマンソー内閣に対する内外の問題での対応をめぐって議員グループの行動を批判した。⁽⁴⁷⁾

8月13日にジョレースが演壇に立ち、エルヴェの「ヨンヌ県連合提案」と

(46) *Ibid.*, pp. 263-264

(47) Parti Socialiste (Section Française de l'Internationale Ouvrière) : *4^e Congrès National tenu à Nancy les 11, 12, 13 et 14 Août 1907. Compte Rendu sténographique.* Paris. Au siège du Conseil National. 1907. pp. 136-144

エルヴェの思想を痛烈に批判する。

前回のリモージュ大会で過半数の支持を得て可決された「セーヌ県連合提案」は「リモージュ提案」と呼ばれるようになり、一方この大会でリモージュ提案と呼ばれたセーヌ県連合案は既にリモージュ大会でこの案が可決されて、不要になった「セーヌ県連合大会は次のように提案する。1° 問題が議論された場合は即時に採択し、議論されなかった場合にはそれらを各県連合の検討に付託して次の全国大会に提出するためにリモージュ大会に提案する。2° シュトゥットガルト国際大会に提案する」と書かれた前文は削除され、全体会議には「第 1 決議」と「第 2 決議」に分けて採決された。⁽⁴⁸⁾

リモージュ大会で否決されたノール県連合の提案を一部修正してドルドーニュ県連合提案としてナンシー大会に再提出した「ドルドーニュ県連合提案」の文面は以下の通りで、内容と主旨において前回のノール県連合提案とほとんど変わりはない。

「軍国主義はすべてのインターナショナル大会で確認し宣言したように、利害対立と階級対立に基礎を置く資本主義体制の当然で必然的な結果であり、軍国主義はその根本原因である資本主義の消滅によってしかなくならないことにかんがみ、

その結果労働者のすべての尽力を現存する社会の軍国主義の廃止に集中させることにより、望むと望ままいと労働者階級を資本主義の収奪と生産手段の社会的領有のため政治権力を奪取するという唯一の関心事からそらして社会保存⁽⁴⁹⁾に加担することになるのにかんがみ、

他方でこの欺き共犯にする反軍国主義が推奨する手段（戦線逃亡と軍役ストライキから蜂起にいたるまで）は、社会主義者のプロパガンダと党員の徴募をより困難にさせプロレタリアートが十分に組織され強力になって、軍国主義と戦争をなくして社会革命を成し遂げる時を遠ざけることにかんがみ、

ユートピアや危険な試みではない軍国主義に反対し平和を擁護する唯一の

(48) *Ibid.*, pp. 317-320

(49) 社会保存という語は現体制維持を意味している。

運動 (キャンペーン) は全世界の労働者を資本主義を解体するために組織する社会主義の運動 (キャンペーン) であり、その間にも国際的に追求される兵役の短縮と陸軍・海軍・植民地の軍事予算を同時に拒否し、常備軍を全人民武装に置き換えることによって可能な限りまで国際紛争を回避させることが出来る、と宣言する⁽⁵⁰⁾」

極左派のエルヴェ派がリモージュ大会に提案した「ヨンヌ県連合提案」は妥協の余地がないエルヴェの議論同様に一字一句修正されずにふたたびナンシー大会に提案された⁽⁵¹⁾。

ナンシー党大会での3つの県連合提案の採決結果は以下の通りであった。

最初に採決されたのはヨンヌ県連合決議であった。賛成41票、反対251票、棄権12票、欠席6票で否決された。前回よりも10票ほど賛成票が増加しているが、全体の票数が前回の185票からナンシー大会では欠席を含め310票に増加しているのであるから、割合においては減少している。支持票を投じた主要な県連合は、ヨンヌ県連合3票、セヌー-エ-オワーズ県連合とヴォクリューズ県連合が4票であるが、前回1票も投じなかったセヌ県連合から10票も賛成票をいれていることに注目するべきである。反対票はリモージュ動議を支持したヴァイアン派とジョレース派の県連合から投じられている。ノール県連合からは44票がセヌ県連合からは21票が反対票として投じられた⁽⁵²⁾。

次に採決されたのはゲード派のドルドーニュ県連合動議であった。この動議については賛成123票、反対175票、棄権6票、欠席6票で否決された。賛成票を投じたのはノール県連合 (44票) とパードーカレー県連合 (11票) など伝統的にゲード派の影響力が強い県で、ついでミルラン入閣をめぐって一時期ゲード派から多くの県連合が離反したが党の統一前後に復帰した地中海沿岸南仏の県連合であるガール県連合 (6票)、エロー県連合 (6票) など

(50) 4^e Congrès National. *op. cit.*, pp. 170-171

(51) *Ibid.*, pp. 214-215

(52) *Ibid.*, pp. 315-316

の支持票が多く、ヴァイアン派の拠点ではあるが諸勢力が混在するセーヌ県連合からは 5 票の賛成票が投じられている。反対票を投じたのはヴァイアンとジョレースのリモージュ動議に賛成票を投じた県連合とエルヴェ派支持の県連合である。⁽⁵³⁾

以上の 2 つの動議については賛否の分布は比較的に明快であった。

それに対し「リモージュ動議」の第 1 動議と第 2 動議と第 1 動議と第 2 動議を合わせた全体の動議について 3 回の票決がなされた。これら 3 回の票決は非常に微妙で判然としない点も多くある。

「リモージュ第 1 動議」にたいする評決結果は賛成 215 票、反対 23 票、棄権 30 票、欠席 3 票である。大半のゲート派の県連合も賛成票を投じ圧倒的多数で可決された。反対票を投じたのはヨンヌ県連合のほかにエルヴェ派のヨンヌ県連合を支持したヴォクリューズ県連合のような県連合で、エルヴェの反愛国主義を批判した決議であるので理解できる。しかしガール県連合の 3 票のようにゲード派の県連合が反対票を投じた場合がある。⁽⁵⁴⁾

「リモージュ第 2 動議」に対しては賛成 169 票、反対 126 票、棄権 9 票、欠席 6 票とかなりの反対票がこの案に投じられた。内訳を見ると、反対票の多くはノール県連合、パードーカレー県連合、アリエ県連合、ドルドーニュ県連合などのゲード派の県連合であった。エルヴェ派の県連合からはヨンヌ県連合をはじめヴォクリューズ県連合、ブッシューデュローヌ県連合などが反対し、セーヌーエーオワーズ県連合などは棄権した。⁽⁵⁵⁾

一番微妙であったのは第 1 動議と第 2 動議を合わせた「リモージュ動議」全体への賛否であった。賛成 188 票、反対 16 票、棄権 100 票、欠席 6 票で、棄権票が極めて多かったことが注目される。エルヴェ派の県連合はおおかた賛成に回った。一方ゲード派はガール県連合、ロワール県連合が反対票を投じたものの大勢のゲード派県連合はノール県連合 (44 票)、パードーカレー県

(53) *Ibid.*, pp. 316-317

(54) *Ibid.*, pp. 318-319

(55) *Ibid.*, pp. 319-320

連合 (11票)、セヌ県連合少数派 (5票) など棄権票を投じた。「リモージュ第1動議」に比較して賛成票はかなり減少した。ゲード派が「リモージュ第2動議」ではゼネラル・ストライキと蜂起の提案をしていることに大きな抵抗があったことが原因であろうが、エルヴェ派は「リモージュ第1動議」で彼らの表看板である「反愛国主義」を否定されても、ゼネラル・ストライキと蜂起の提案をしている「リモージュ第2動議」を評価して賛成票を投じたことに、さらには彼らの支持票なしにはこの案の過半数獲得がかなり危うかったことに留意するべきであろう。⁽⁵⁶⁾

ナンシー大会最終日である8月15日第4日目の日程を終えると、8月18日に開会式が開かれる社会主義インターナショナル・シュトゥットガルト大会に参加するために、シュトゥットガルト大会への代表はナンシーからシュトゥットガルトに向かった。フランスの代表の数は78名に及んだ。地元ドイツの289名とイギリスの123名に次ぐ数多くの代表を大会に派遣した。ちなみに第4位の代表者数を送ったのはオーストリアでその数75名 (この中にはボヘミアから派遣された41名は含まれない) に及ぶ。⁽⁵⁷⁾ この大会の参加者にはアムステルダム大会の主役となったベーベルやジョレースなどのほかにローザ・ルクセンブルクやクララ・ツェトキン、レーニン、ラムゼイ・マクドナルドなどの著名な社会主義者も含まれていた。

(次号に続く)

(56) *Ibid.*, pp. 320-321

(57) HAUP, Georges ; *La Deuxième Internationale. op. cit.*, pp. 198-199

正 誤 表

拙稿『ドレーフェス事件から第 1 次大戦までの社会主義派議員の代議院での投票行動』(1)（2・完）

國學院法學第53卷 2 号と國學院法學第54卷 2 号の正誤表

國學院法學第53卷 2 号 114頁 表 - II 1902-1906年会期の投票行動(26-50) 53-54行

	(票決番号)	26	27	28	29	30	31	32	33	34
誤×		309	265	350	317	322	331	194	257	246
誤×		117	240	187	203	233	218	315	300	304

正○	賛 成 票	281	284	317	97	117	84	70	26	135
正○	反 対 票	271	265	182	447	415	482	480	438	412

同巻同号 115頁 表 - II 1902-1906年会期の投票行動(26-50) 2 行目 8 列目 票決番号42

誤× 1902年 2 月24日 Gouzy 動議 motion (第 1 部) の票決
 正○ 1902年 2 月24日 Gouzy 動議 motion (第 2 部) の票決

同巻同号 115頁 表 - II 1902-1906年会期の投票行動(26-50) 53-54行

票決番号	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50
誤×	240	106	300	203	228	228	307	307	283	306	366	420	27	318	319	411
誤×	265	322	9	312	322	320	245	245	272	241	144	90	507	230	147	85

正○	218	236	48	319	332	512	420	472	502	64	439	277	289	68	422	336
正○	312	267	454	165	206	5	2	10	19	503	42	291	279	409	45	226

同巻同号 117頁 25行目

誤× フラン
 正○ 労働者負担分

國學院法學第54卷 2 号10頁 表 - III 1906-1910年会期の社会党議員の投票行動 63-64行

	(票決番号)	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11
誤×	賛成総数	309	265	350	317	322	331	194	257	246	240	106
誤×	反対総数	117	240	187	203	233	218	315	300	304	265	322

正○	賛 成 票	234	304	412	400	137	147	433	376	391	454	364
正○	反 対 票	267	183	53	88	343	389	83	94	143	92	187

同巻同号 11頁 表-Ⅲ 1906-1910年会期の社会党議員の投票行動 63-64行目

票決番号	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31
誤×	300	203	228	228	307	307	283	306	366	420	27	318	319	411	366	420	27	318	319	411
誤×	9	312	322	320	245	245	272	214	144	90	507	230	147	85	144	90	507	230	147	85
正○	47	365	135	323	327	426	134	326	319	407	312	388	346	333	176	306	187	225	410	27
正○	466	66	299	205	223	87	381	113	86	59	53	129	118	151	212	46	345	291	135	466

同巻同号 24頁 表-Ⅳ 1910-1914年会期の投票行動 44-45行目

	票決番号	1	2	3	4	5	6	7	8
誤×	賛成総数	309	265	350	317	322	331	194	257
誤×	反対総数	117	240	187	203	233	218	315	300
正○	賛成票	404	76	329	296	152	187	262	309
正○	反対票	121	464	183	209	357	354	238	144

同巻同号 25頁 表-Ⅳ 1910-1914年会期の投票行動 44-45行目

票決番号	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24
誤×	246	240	106	300	203	228	228	307	307	283	306	366	420	27	318	319
誤×	304	265	322	9	312	322	320	245	245	272	241	144	90	507	230	147
正○	223	107	363	248	367	393	440	413	443	339	324	386	339	333	265	293
正○	341	417	150	224	173	36	6	81	85	217	77	165	223	225	290	137